

古英語における過去複数を示す動詞の屈折語尾に関する研究 (3) : 宗教叙事詩 *Judith* を中心に

鴫崎 敏彦

日本獣医生命科学大学 応用生命科学部 動物科学科 英語学教室

要約 本稿では、10世紀の終わり頃に筆写されたとされる *Judith*¹⁾ に現れる過去複数を示す動詞の屈折語尾の全用例を対象とし、法の違い・動詞の活用変化の違いの2つの観点から考察した。その結果、法の違いに関しては、*Judith* では、水平化の過程において、直説法過去複数を示す屈折語尾では標準形の *-on* とその異形である *-an* の両形が見られるが、叙想法過去複数では *-on* と *-en* が見られ、直説法過去複数を示す屈折語尾に倣った *-an* の導入はまだ始まっていないことが分かった。また、上述の水平化の中で最も早く起こった変化はおそらく *-on* から *-an* への変化であろうという Armbrorst (1977) の指摘を支持する証拠が得られた。活用変化の違いに関しては、*-an* は強変化動詞・弱変化動詞・過去現在動詞の別を問わず出現していると推察された。以上のことは、鴫崎 (2015) の *Beowulf* の考察の結果とほぼ同様であった。

キーワード：屈折語尾、過去複数、活用変化

日獣生大研報 66, 8-13, 2017.

1. はじめに

古英語期における過去複数を示す動詞の屈折語尾に関して、よく使用されている古英語の入門書 Davis (1980) や Quirk and Wrenn (1957) などによると、直説法過去複数では (1) ④の下線部のように *-on* が標準形とされ、叙想法過去複数では (1) ⑥の下線部のように *-en* が標準形とされている。次の (1) を参照されたい (pres.;present, indic.; indicative, sg.;singular, p.;person, pret.;preterite, pl.; plural, subj.;subjunctive)。

(1) General Notes on Verb Inflexions

Person

- ① The pres. indic. sg. alone has distinctive forms for the first, second, and third persons; 1 p. sg. ends in *-e*, 2 p. sg. in *-st*, 3 p. sg. in *-ð*.
- ② The pret. indic. sg. has identical 1 and 3 p. forms (*-e* consonantal, no ending vocalic), but a distinctive 2 p. (*-est* consonantal, *-e* vocalic)
- ③ The pres. indic. pl. and pret. indic. pl., and the pres. and the pres. and pret. subj. sg. and pl. show no distinctions of person.

Tense

- ④ The pres. indic. pl. almost always ends in *-að*, the pret. indic. pl. always in *-on*.
- ⑤ Consonantal and most irregular verbs have a dental suffix in all preterite forms (*herian-herede*) ;

vocalic verbs form the preterite with changes of stem-vowel (*bindan-band-bundon*).

Mood

- ⑥ The pres. and pret. subj. sg. are in *-e*, pl. in *-en*.
- ⑦ There are in general but two imperative forms, a 2 p. sg. in *-e*, *-a*, or without ending, and a 2 p. pl. in *-að*.

Non-finite forms

- ⑧ Infinitives end in *-(i)an*, present participles in *-(i)ende*; past participles normally have the prefix *ge-* and end in *-ed* (consonantal), or *-en* (vocalic).

The whole paradigm of a given verb can be inferred from selected items (*principal parts*) as follows: infinitive (and pres. indic. 3 p. sg.), pret. indic. 1 and 3 p. sg., 1-3 p. pl. (vocalic verbs only), and past participles.

(Quirk and Wrenn 1957: 41, 下線は筆者)

しかしながら、現存する最古の英文学作品と言われる英雄叙事詩 *Beowulf* を調べてみると、(2) のように過去複数を示す屈折語尾として *-on*、*-en*、*-an*、*-un*、*-e* の5種類の語尾が出現しており、代表的な古英語の入門書にある標準形の記述とは異なった様相を呈している ((2) の *Beowulf* の後の数字は行数を示す)。

- (2) a. *Beowulf* 2 þeodcyninga þrym gefrunon,
- b. *Beowulf* 1212 wýrsan wigfrecan wæl reafeden
- c. *Beowulf* 43 Nalæs hi hine læssan lacum teodan,

- d. *Beowulf* 60 in worold wocun, weoroda
ræswa[n].
- e. *Beowulf* 905 lemede to lange; he his leodum
wearð,

そこで、鴫崎 (2014) では、古英語における過去複数を示す5種類の屈折語尾の現れ方の特徴を解明するために、まず4つの先行研究を概観した。そして、それらの4つの先行研究に基づくと、*Beowulf* など10世紀の文献における過去複数を示す屈折語尾の多様性に、法の違いや動詞の活用変化の違いなどの要素が関与している可能性があることを示した。

また、鴫崎 (2015) では、以上の点を検証するために、10世紀の終わり頃に筆写されたとされる *Beowulf* に現れる過去複数を示す動詞の屈折語尾の全用例を対象とし、法の違い・動詞の活用変化の違いという2つの観点から考察した。その結果、法の違いに関しては、水平化の過程において、直説法過去複数を示す屈折語尾では *-on* と *-on* の異形である *-an*、*-un*、*-en*、*-e* の5種類が見られる一方、叙想法過去複数では *-on* しか見られず、直説法過去複数を示す屈折語尾に倣った *-an* の導入はまだ始まっていないことが分かった。また、直説法過去複数を示す *-on* 以外の屈折語尾の中では *-an* の出現数が最多であったことから、Armborst (1977) が指摘するように、上述の水平化の中で最も早く起こった変化はおそらく *-on* から *-an* への変化であろうことを示した。

本稿では、鴫崎 (2015) で明らかになった *Beowulf* における過去複数を示す屈折語尾の現れ方の特徴が10世紀の古英語の一般的な特徴になるのかということを検証するために、British Library Cotton Vitellius A. XV の後半部 (以下、ノーウェル写本) に *Beowulf* と共に収められている宗教叙事詩 *Judith* に現れる過去複数を示す屈折語尾の全用例を調査・分析し、その現れ方の特徴を考察する。

2. 先行研究：鴫崎 (2014) と鴫崎 (2015)

鴫崎 (2014) では、古英語における過去複数を示す5種類の屈折語尾の現れ方の特徴を解明するために、まず4つの先行研究を概観した。そして、*Beowulf* を含む10世紀の文献の調査に関して、以下のように、明らかにされている点と不十分な点を示した。

まず、Malone (1930) は、*Beowulf* を含む4種類の写本を調査し、それらの写本に現れる名詞・動詞の屈折語尾の多様性の原因を音韻変化に求めた。しかし、Malone は概して過去複数を示す *-an* と *-un* に関して記述していないため、古英語における動詞の屈折語尾に関する研究としては不十分である。

そして、Marckwardt (1949) は、10世紀と11世紀における直説法過去複数を示す *-an*、*-en*、*-e* の出現には一定の傾向があり、10世紀では強変化動詞・過去現在動詞の屈折語尾として、11世紀では強変化動詞・過去現在動詞・変則動詞の屈折語尾として出現する割合が高いと指摘して

いる。しかし、Marckwardt が10世紀の傾向の論拠とした用例は Malone の用例を引用したものであり、*-an* の例が含まれていないため、10世紀における直説法過去複数を示す *-an*、*-en*、*-e* の出現傾向を結論付けるのに十分な証拠であるとは言い難い。

また、Armborst (1977) は、10世紀における直説法過去複数を示す *-en*、*-e* に関して、強変化動詞と弱変化動詞でその出現率に大きな差異は認められないとしており、上述の Marckwardt の指摘とは異なることを示唆している。しかし、Armborst も Malone が調査した用例を基にして Marckwardt の矛盾点を示唆しているだけであり、*-an* の例が含まれていないため、Marckwardt が指摘した傾向の全てを否定できているわけではない。また、過去複数を示す *-un* について全く触れていない点でも不十分である。

最後に、Ichikawa (2002) は、*Beowulf* に現れる *-un* は現存するテキスト以前に存在したテキストから伝わったものであり、Anglia 方言の過去複数屈折語尾である可能性が高いということを示唆している。しかし、*-un* の保持に動詞の活用変化の違いが関与しているかどうかなどの問題点を指摘し、検証すべき課題は数多く残っていると述べている。

以上のような先行研究についての検証から、これまで十分に論じられてこなかった *-an* を含め、*Beowulf* など10世紀の文献における過去複数を示す屈折語尾の多様性に、法の違いや動詞の活用変化の違いなどの要素が関与しているかどうかということが、今後の研究課題となった。

そこで、鴫崎 (2015) では、10世紀の代表作 *Beowulf* に現れる過去複数を示す5種類の屈折語尾 (*-on*、*-en*、*-an*、*-un*、*-e*) の全用例を対象とし、法の違い・動詞の活用変化の違いの観点から考察した。その結果、*Beowulf* における過去複数を示す屈折語尾の現れ方の特徴に関して、次のことが分かった。

まず、Armborst (1977) で指摘されている通り、*Beowulf* では、叙想法過去複数を示す屈折語尾の全てに、直説法過去複数の標準形と同形の *-on* が用いられており、直説法と叙想法の形態的区別はすでに消失していた。そして、Armborst (1977) は、古英語期の比較的初期の段階から叙想法過去複数の文脈で頻出する *-an* は直説法過去複数を示す *-on* の異形を導入したものであると指摘している。しかし、*Beowulf* では、水平化の過程において、直説法過去複数を示す屈折語尾では *-on* と *-on* の異形である *-an*、*-un*、*-en*、*-e* の5種類が見られるが、叙想法過去複数では *-on* しか見られず、*-an* の導入はまだ始まっていないことが分かった。また、*Beowulf* における直説法過去複数を示す *-on* 以外の屈折語尾の出現数を調べたところ、*-an* が24例、*-un* が4例、*-en* が1例、*-e* が3例と、*-an* が最多であった。このことは、直説法過去複数を示す屈折語尾の水平化の中で最も早く起こった変化はおそらく *-on* から *-an* への変化であろうという Armborst の指摘を支持する証拠と考えられる。

次に、過去複数を示す屈折語尾の用例を活用変化の違いによって分類して、*-an*, *-un*, *-en*, *-e* の 4 種類の屈折語尾がどのように分布しているかを調査した。その結果、*Beowulf* において *-an* は弱変化動詞でも強変化動詞と同程度に使用されていることが明らかになった。この結果は、直説法過去複数を示す *-an*, *-en*, *-e* は 10 世紀では強変化動詞・過去現在動詞の屈折語尾として、11 世紀では強変化動詞・過去現在動詞・変則動詞の屈折語尾として出現する割合が高いとしている Marckwardt (1949) の指摘と明らかに矛盾している。

鴫崎 (2015) では *Beowulf* における過去複数を示す屈折語尾の現れ方の特徴が明らかになった。しかし、これが 10 世紀の古英語の一般的な特徴になるのかどうかという問題は残されたままである。この問題を検証するために、次節では、ノーウェル写本に *Beowulf* と共に収められている宗教叙事詩 *Judith* に現れる過去複数を示す屈折語尾の全用例を調査・分析し、その現れ方の特徴を法の違い・動詞の活用変化の違いの 2 つの観点から考察する。

3. *Judith* に基づく分析

349 行から成る宗教叙事詩 *Judith* における過去複数を示す 5 種類の屈折語尾 (*-on*, *-an*, *-un*, *-en*, *-e*) のそれぞれの用例数を調べたところ、*-on* は 78 例、*-an* は 4 例、*-un* は 0 例、*-en* は 2 例、*-e* は 0 例であった。次に全用例を示すので参照されたい (動詞の前の数字は行数を示す)。

(3) a. *-on* (84 例)

11 *ræfndon* / 11 *comon* / 15 *eodon* / 17 *wæron* / 19 *þegon* / 27 *gebærdon* / 30 *lagon* / 31 *wæron* / 37 *fremedon* / 39 *stopon* / 41 *fundon* / 42 *ongunnon* / 54 *gebrohton* / 55 *eodon* / 69 *stopon* / 72 *læddon* / 132 *Eodon* / 134 *becomon* / 140 *hæfdon* / 141 *sæton* / 142 *heoildon* / 158 *drugon* / 159 *wurdon* / 160 *gehyrdon* / 164 *þrungon* / 164 *urnon* / 168 *ongeaton* / 170 *forleton* / 200 *Stopon* / 201 *bæron* / 202 *foron* / 205 *hlummon* / 208 *þohton* / 212 *Stopon* / 215 *þoledon* / 219 *hæfdon* / 221 *leton* / 223 *styrmdon* / 224 *sendon* / 225 *wæron* / 227 *stopon* / 228 *wrehton* / 229 *brugdon* / 231 *slogon* / 233 *sparedon* / 235 *mihton* / 237 *ehton* / 238 *ongeaton* / 238 *wæron* / 240 *eowdon* / 243 *eodon* / 243 *wrehton* / 244 *bodedon* / 250 *Hogedon* / 253 *Mynton* / 255 *wæron* / 262 *fuhton* / 263 *guldon* / 267 *stodon* / 270 *ongunnon* / 273 *Hogedon* / 284 *wæron* / 290 *wurpon* / 296 *Flugon* / 296 *lyfdon* / 302 *worhton* / 303 *heowon* / 304 *scæron* / 304 *wæron* / 311 *Cirdon* / 318 *Hæfdon* / 321 *reston* / 322 *wæron* / 325 *wægon* / 325 *læddon* / 331 *geedon* / 335 *brohton* / 341 *ageafon*

b. *-an* (4 例)

139 *onettan* / 204 *dynedan* / 207 *westan* / 290

gewitan

c. *-en* (2 例)

24 *mihten* / 136 *mihten*

3.1 法の違い (直説法 / 叙想法) から見た過去複数を示す屈折語尾

まず、(3a) ~ (3c) における過去複数を示す屈折語尾の全用例を法の違い (直説法 / 叙想法) によって分類し、3 種類の屈折語尾 (*-on*, *-an*, *-en*) がどのように分布しているかを調べてみる。法とは、文の内容に対する話者の心的態度を表す動詞の語形のことである。Davis (1980) は叙想法を、(4) のように、あることがらを事実としてではなく、心の中で考えられたこと (願望、条件、疑いなど) として述べる言い方であると定義している。

(4) The subjunctive mood states something not as a fact, as the indicative does, but merely as an object of thought. Hence it is used to express wish, condition, doubt, and the like. (Davis 1980: 54)

Beowulf や *Judith* ように、多様な屈折語尾が出現し、(1) で示したような規範的な語尾の使い分けがなされていない場合には、直説法か叙想法かの判断が難しい例も存在する。したがって、本稿では、Mitchell and Robinson (2001) の語彙解説なども参考にしながら、(4) の定義に当てはまる例を抽出し、(5) の 6 例を叙想法の例として扱うことにする。

(5) 叙想法過去複数 (6 例)

a. *-on* (4 例)

27 *gebærdon* / 31 *wæron* / 235 *mihton* / 255 *wæron*

b. *-en* (2 例)

24 *mihten* / 136 *mihten*

(5a, b) が示すように、叙想法過去複数を示す屈折語尾として、直説法過去複数の標準形と同形である *-on* が 4 例、叙想法過去複数の標準形である *-en* が 2 例現れている。

(5) で示した叙想法過去複数の文脈では、屈折語尾に *-on* と *-en* のみが用いられているので、*Judith* では、(3b) で示した *-an* は全て直説法過去複数を示す屈折語尾として出現していることになる。このように、標準形 *-on* と共に *-an* や *-un*, *-en* が現れてきて屈折語尾が曖昧化し、*-en* の *n* が脱落して語尾が消失していく過程を屈折語尾の水平化 (leveling) と呼ぶ。用例数が少ないため断定的なことは言えないが、法の違いによる形態的区別を見ると、*Judith* では (5b) のように *-en* が 2 例残っている。この点から、過去複数を示す屈折語尾における直説法と叙想法の形態的区別は完全に消失してはいないことが分かる。しかし、(5a, b) が示すように、出現率では *-on* の方が高いことから、上述の形態的区別は消失に向かう過渡期にあると言ってよいだろう。この点は (6) の *-on* に関する指摘の通りである。

(6) ... the relatively early and considerable spellings of *-on/-an* for the *-en* ending of the preterite plural subjunctive of weak and strong verbs in West

Saxon ... (Armborst 1977: 1)

(6) で示したように, Armborst (1977) は, *-on* と *-an* の両方が, 古英語期の比較的初期の段階で, 叙想法過去複数を示す屈折語尾として頻出すると指摘している。叙想法過去複数の文脈における *-an* の出現に関して, Armborst は, (7) のように, 直説法過去複数を示す *-on* の異形を導入したものであると指摘している。

(7) One must be careful to separate here cases of *-an* spellings for *-en* of the preterite subjunctive plural, ..., since this is not a reverse spelling, but rather (...) a variant of *-on* levelled early (...) from the preterite indicative plural into the subjunctive.

(Armborst 1977: 15)

(5a, b) が示すように, 叙想法過去複数の文脈では, 屈折語尾に *-on* と *-en* のみが用いられていることから, *Judith* では, 直説法過去複数を示す *-on* の異形である *-an* の叙想法過去複数の文脈への導入はまだ始まっていないことが分かる。

(3b) で見られる直説法過去示す屈折語尾の水平化に関して考察を加える。直説法過去複数を示す屈折語尾の水平化に関して, Armborst (1977) は, (8) のように, Marckwardt (1949) が調査した 11 世紀に書かれた 15 種類のテキストからの用例を基にして, 最も早く起こった変化はおそらく *-on* > *-an* であろうと指摘している。

(8) Marckwardt states that all but one of the eleventh-century texts he examined show cases of levelling in the inflectional syllable of the preterite plural indicative — 306 cases of *-an* (as the frequency indicates, probably the earliest of the three changes recorded here; cf. n. 14) ; 35 cases of *-en*; 28 cases of *-e*; giving a total of 369 occurrences of an indication levelling of some degree or sort as against 2006 cases of traditional *-on*. (Armborst 1977: 10)

ただし, この Armborst の指摘は, 11 世紀に書かれたテキストからの用例を基にした推論であり, 10 世紀のテキストの用例を精査していない。この点で, 直説法過去複数を示す屈折語尾の水平化の起こりを結論付けるには不十分であると言える。*Judith* の調査結果は, 直説法過去複数を示す *-on* 以外の屈折語尾として *-an* のみが出現していることから, (8) の Armborst の指摘を支持するものとなっている。

3.2 活用変化の違いから見た過去複数を示す屈折語尾

次に, (3b, c) の *Judith* における過去複数を示す *-on* 以外の屈折語尾の用例を活用変化の違いによって分類した場合, *-an*, *-en* の 2 種類の屈折語尾がどのように分布しているかを調べてみる。一般に古英語の動詞は, その活用の仕方によって強変化動詞 (I 類~VII 類)・弱変化動詞 (1 類~3 類)・過去現在動詞・変則動詞の 4 種類に分類される。この分類に基づいて *-an* (4 例), *-en* (2 例) の 2

種類の屈折語尾の分布を調べてみたところ, 次の第 1 表のようになった²⁾。

第 1 表. 動詞の活用変化と 2 種類の屈折語尾の分布

		<i>-an</i>	<i>-en</i>
強変化動詞	I 類	1	
小計 (強変化動詞)		1	0
弱変化動詞	1 類	1	
	2 類	1	
小計 (弱変化動詞)		2	0
過去現在動詞		1	2
変則動詞		0	0

第 1 表から明らかなように, *Judith* では, *-en* は過去現在動詞の屈折語尾としてのみ出現しているが, *-an* に関しては, 強変化動詞の屈折語尾として出現する例が 1 例, 弱変化動詞の場合が 2 例, 過去現在動詞の場合が 1 例となっている。このことから明らかなように, 直説法過去複数を示す *-an* の出現には一定の傾向があるとは言いがたい。

この結果は, 第 2 節の先行研究で示した 10 世紀と 11 世紀における直説法過去複数を示す *-an*, *-en*, *-e* の出現には一定の傾向があり, 10 世紀では強変化動詞・過去現在動詞の屈折語尾として, 11 世紀では強変化動詞・過去現在動詞・変則動詞の屈折語尾として出現する割合が高いとしている Marckwardt (1949) の指摘と明らかに矛盾している。Armborst (1977) も同様に Marckwardt の上述の指摘には矛盾があると示唆している。

しかし, Armborst が根拠として用いた用例には *-an* が含まれていないため, Marckwardt の指摘の全てを否定できてはいなかった。鴫崎 (2015) によると, *Beowulf* では, 少なくとも *-an* に関しては, Marckwardt が指摘するような傾向は存在せず, *-an* は弱変化動詞でも強変化動詞と同程度に使用されていた。用例数が少ないので断定的なことは言えないが, この調査結果から, 10 世紀の終わり頃に筆写されたとされる *Judith* でも, *-an* に関しては, Marckwardt が指摘するような傾向は存在せず, *-an* は強変化動詞・弱変化動詞・過去現在動詞の別を問わず出現していると言ってよいだろう。

4. ま と め

本稿では, 先行研究において十分に論じられているとは言いがたい *-an* を含め, 10 世紀の終わり頃に筆写されたとされる *Judith* に現れる過去複数を示す 3 種類の屈折語尾 (*-on*, *-en*, *-an*) の全用例を対象とし, 法の違い・動詞の活用変化の違いの観点から考察した。その目的は, 鴫崎 (2015) で明らかになった *Beowulf* における過去複数を示す屈折語尾の現れ方の特徴が 10 世紀の古英語の一般的な特徴になるのかを検証し, 古英語における過去複数を示す 5 種類の屈折語尾の現れ方の特徴を解明することである。その結果, *Judith* における過去複数を示す屈折語尾の現れ

方の特徴に関して、次のことが分かった。

まず、過去複数を示す屈折語尾における直説法と叙想法の形態的区別は完全に消失してはいないが、消失に向かう過渡期にあると推察された。そして、直説法過去複数を示す屈折語尾の水平化は始まっているが、直説法過去複数を示す *-on* の異形である *-an* の叙想法過去複数の文脈への導入はまだ始まっていないことが分かった。また、Armborst (1977) が指摘するように、直説法過去複数を示す屈折語尾の水平化の中で最も早く起こった変化はおそらく *-on* から *-an* への変化であることが分かった。

次に、過去複数を示す屈折語尾の用例を活用変化の違いによって分類し、*-an*、*-en* の 2 種類の屈折語尾がどのように分布しているかを調べた。その結果、直説法過去複数を示す *-an* の出現に Marckwardt (1949) が指摘するような一定の傾向は認められず、*-an* は強変化動詞・弱変化動詞・過去現在動詞の別を問わず出現していると推察された。

以上のことは、鴫崎 (2015) の *Beowulf* の考察の結果とほぼ同様であった。鴫崎 (2015) と今回の調査によって *Beowulf* と *Judith* における過去複数を示す屈折語尾の現れ方の特徴は明らかになった。しかし、これが 10 世紀の古英語の一般的な特徴になるのかということを検証するためには、*Beowulf* や *Judith* と同時期の文献における過去複数を示す屈折語尾の用例を分析する必要がある。これらの調査に関しては今後の研究に譲ることとする。

注

¹⁾ *Judith* が *Beowulf* と共に収められているノーウェル写本は 11 世紀初頭に筆写された可能性もあるとの指摘があるが (Jack (1997)), 本稿では、Malone (1930), Marckwardt (1949), Armborst (1977) と同様に、10 世紀末に筆写された文献として扱うこととする。

²⁾ Dobbie (1953) や Mitchel and Robinson (2001) など多くの編集者は 207 行目の *westan* を *witan* の過去複数形を誤記したものと判断し、編集の際に *wistan*[*wiston*] と校訂を施している。そこで、本稿では、この例を *witan*

の過去複数形として扱い、過去現在動詞の用例に含めることにする。

参 考 文 献

- ARMBORST, B. (1977). "Evidence for Phonetic Weakening in Inflectional Syllables in *Beowulf*." In *Leeds Studies in English* 9, pp. 1-18.
- DAVIS, N. ed. (1980). *Sweet's Anglo-Saxon Primer*, 9th ed. Oxford: Clarendon Press.
- DOBBIE, E. V. K. (1953). *Beowulf and Judith*. New York: Columbia University Press.
- ICHIKAWA, M. (2002). "Some Notes on the Inflectional Ending for the Preterite Plural *-un* in *Beowulf*." In *Thought Currents in English Literature* 75. Tokyo: The English Literary Society of Aoyama Gakuin University, pp. 59-73.
- JACK, G. ed. (1997). *Beowulf: A Student Edition*. Oxford: Oxford University Press.
- MALONE, K. (1930). "When Did Middle English Begin?" In Hatfield J. T., Leopold, W. and Zieglichschmid, A. J. F. eds. *Curme Volume of Linguistic Studies: on the Occasion of his Seventieth Birthday*. Baltimore: Waverly Press, pp. 110-117.
- MARCKWARDT, A. H. (1949). "Verb Inflections in Late Old English." In Kirby T. A. and Woolf, H. B. eds. *Philologica: the Malone Anniversary Studies*. Baltimore: Johns Hopkins Press.
- MITCHELL, B. and ROBINSON, F. C. (2001). *A Guide to Old English*, 6th ed. Oxford: Blackwell.
- QUIRK, R. and WRENN, C. L. (1957). *An Old English Grammar*. London and New York: Methuen.
- 鴫崎敏彦 (2014). 「古英語における過去複数を示す屈折語尾に関する研究：先行研究の概観を中心に」『日本獣医生命科学大学研究報告』63, pp. 71-75.
- 鴫崎敏彦 (2015). 「古英語における過去複数を示す屈折語尾に関する研究(2): 英雄叙事詩 *Beowulf* を中心に」『日本獣医生命科学大学研究報告』64, pp. 44-49.

Study of Inflectional Endings for the Preterite Plural in Old English (3) : Focusing on *Judith*

Toshihiko TOKIZAKI

Laboratory of the English Language, Nippon Veterinary and Life Science University

Abstract

In this paper, we have taken all examples of inflectional endings for the preterite plural in the religious epic *Judith* and have examined them in terms of mood and verb conjugation. We have found that the leveling of the *-on* preterite indicative plural ending to *-an* had already occurred at the time of *Judith*, but the introduction of *-an*, which is the variant of the *-on* preterite indicative plural ending, into the preterite subjunctive plural had not yet been seen. In addition, we have obtained evidence that supports the assumption of Armborst (1977) that *-an* is the earliest form seen in the leveling of the preterite indicative plural ending. We have conjectured that the *-an* preterite indicative plural ending may occur regardless of whether the verb roots are strong verbs, weak verbs, or preterite-present verbs. The aforementioned findings are almost the same as those of Tokizaki (2015), in which we have examined all the examples of inflectional endings for the preterite plural in *Beowulf*.

Key words : inflectional ending, preterite plural, verb conjugation

Bull. Nippon Vet. Life Sci. Univ., **66**, 8-13, 2017.